

平成 28 年度 第 20 回講演会 記録

日 時	平成 29 年 2 月 25 日 (土)
会 場	此花会館梅香殿
講 師	田中 克 京都大学名誉教授
演 題	「森里海連環学」と「森は海の恋人」の協同／平成 28 年度修了式
備 考	参加者数：会員 144 名、一般 14 名、聴講 1 名。計 159 名、 記録 飯田
1. 2016 年度 自然学講座での学びを振り返る (要旨) (1) 講演会 第 2 回 (4 月 23 日) 岡橋清元先生の「日本林業再生への道」から第 19 回 (2016 年 11 月 11 日) 山本義和先生の「武庫川流域圏ネットワークの活動～より安全な武庫川を目指して～」まで、18 名の講師による講演のポイントを前半、後半に分けて解説された。その要点はレジュメ p.2～3 に 6 項目に亘り述べられているとおりである。 (2) 自然観察会 講演会とのセットで 7 回の自然観察会を実施。どの観察会も現場で学ぶことが多くあり、それぞれの観察会の特徴をパワーポイント映像を併用して解説された。自然観察会の企画は余暇を楽しむのみならず、自然や文化を守る人々の考え方や行動に触れることも大切に考えて両立させたいとの趣旨であり、次年度以降も現場で活躍する「人」に会うことを基本にした企画をしたいとの考えを示された。 2. 統合学問「森里海連環学」と社会運動「森は海の恋人」の協同 レジュメに記載のとおり 3. 瀕死の海、有明海の再生に向けて (要旨) (1) かつて「宝の海」といわれた有明海はいまや「瀕死の海」になってしまった。その主な原因 (大規模環境変化) は、①筑後川河川敷からの膨大な砂の採取 ②筑後大堰の設置 ③諫早湾干拓事業 (2) 目先の経済的理由で有明の海を改変し続けたことにより、大陸遺存種といわれる貴重な氷河期の遺産的生物群が失われ、漁業が不振を極め、あげくの果ては、政治の無策と司法の混迷が加わって漁業者と農業者や漁業者同士が対立がおこるなど、地域社会崩壊の危機にある。 (3) このような人為的な水際の破壊は有明海に限らず、東日本大震災後に海岸線をコンクリートの巨大防潮堤で固める三陸沿岸域においても深刻化している。 (4) 一方、有明海の再生を願い懸命の努力が多くの方によって粘り強く続けられている。田中先生は、有明海再生は海と生きる日本の未来を左右するほどの大切な、国家的な問題であるとしてその考えを論文にまとめ、「有明海の環境と漁業」誌第 2 号に「急がば回れの有明海再生 (1) 有明海問題の本質を見据える」として寄稿され、そのコピーをレジュメとして本日配布された。 (5) 有明海問題の本質は、「その時、その場の都合による人為的な陸 (森) と海の分断」である。有明海は雲仙岳、多良山系、背振山系、九重・阿蘇山系など多くの火山に囲まれ、湾奥部には九州最大の筑後川が流入し、また海底湧水により豊富な栄養塩類や微量元素が供給され、森と海が密接に結ばれ、「豊穡の海」の基盤となっていた。この不可分のつながりを人が分断したことこそ瀕死化の本質であり、ここにこそ有明海再生の道があると主張されている。 (6) 有明海の再生に特效薬はない。閉鎖水域としての琵琶湖も同様であるが、滋賀県は 2001 年から、かつて生きものがたくさんいた生態系に戻そうと 50 年計画を策定、10 年ごとにプログラムを見直し現在 2 期目が進行中。 (7) 有明海は長崎、佐賀、福岡、熊本の四県に囲まれ、自治体間の利害関係が生じ、問題解決をいっそう難しくしている。見かけ上は、長崎県は農業者庇護、他の 3 県は漁業者庇護の立場から対立しているが、有明海がなぜ瀕死の海になってしまったのかの本質を議論し突き詰めて行けば、森で涵養された水に基盤をおく農業と漁業の本来兄弟関係にありあり、問題解決の道が開けるはずである。現状は真の原因から遠いところで議論しているから、何時までもまとまらない。	

- (8) 有明海も根本的な再生には、潰したのと同じくらいの年月が必要であるが、私たちに残された時間は少なく、次の世代に托さざるをえない。有明海問題を次世代の若者に自分ごととして捉まえてもらいたく、どうすればこの問題を解決できるのか、身近な取り組み内容や具体例を「有明海的环境と漁業」誌第3号に寄稿する。シニア自然大学校自然学講座有志による干潟再生実験も紹介する。ぜひ読んで欲しい。

【記録者の感想】

- ① 平成28年度の講演会20回と自然観察会7回を終えて本日修了式をとり行なった。
田中克先生の企画を恙なく実行することができ、事故なく修了することができたことを素直に喜びたい。田中克先生はじめ、多くの関係者に多くのご指導やご援助をいただいたことに心から感謝し、この紙面をお借りして御礼を申し上げます。
- ② 4月に佐賀県太良町「自然学講座干潟再生実験区」でアサリ再生実験（観察）を実施し、有明海への理解を高めます。また地元の人々との交流により、有明海再生に頑張っている人々をわずかであっても元気づけてあげることができればと思う。また、有明海再生に現在の私達の力は余りにも微力ではあるが、現地の人々とながりを大切にして、その再生にいささかでも貢献できることを願い、この活動を行なっていきます。

4. 修了式

本日で20回目の講演会を終え、平成28年度の事業は第2回平戸島観察会を残して修了しました。
田中克先生から修了の辞をいただき、児玉利恒代表理事が田中先生への謝辞を、またスタッフ代表として飯田が田中先生と、スタッフを支えて下さった関係者へお礼を述べたあと、平成28年度の活動概要を報告し修了式を終えました。